

優秀賞

## 優しさのスクラム

千葉県 第五中学校 三年  
松本 満優

「小さな親切」運動を知ったきっかけは、ある学校のホームページでした。その学校では委員会として活動しているとのことで、とても共感しました。なぜなら、私は小学校5年生のときに、クラスのみんなの小さな親切に支えられて過ごしていたからです。

4年前、コロナで学校が一斉休校した後、再開となった6月ごろのできごとです。私は5年生へと進級し、新しいクラスの人たちと新学期を迎えるのを心待ちにしていた矢先に、「菊池病」という珍しい病気にかかってしまいました。

私は高熱とリンパ節炎と湿疹と口内炎で食事ができなくなり、手足は枯れ枝のように細くなっていきました。治療方法がなかったので、対処療法のみで3週間が経ち、ようやく登校できる日を迎えました。

けれどこの日の朝、大きな不安に押し潰され、大泣きしたことを覚えています。クラスのみんなが私を快く迎え入れてくれるだろうか、病気は本当に治っているのだろうか。

満身創痍になりながらも、母と4時間目が終わった頃に登校しました。いつもならたった5分の通学路が、険しい登山のように感じられ、足が重くてなかなか前に進まない感覚でした。学校に到着してから、母は担任の先生にまだ体が重いこと、食欲がないこと、それでも少しずつ体を慣らしていかなければならないことなどを伝えて帰りました。

私は教室へ入り席に荷物を降ろし、給食を受け取りに配膳の列に並びました。クラス内はお喋り禁止で、みんな黙ったまま支度をしていました。心の中で、「どうか少なく盛ってくださいように」と祈りながら、順番を待っていました。ところが私の番になったとき、白ご飯をまるでマンガに出てくるようにこんもりとお皿に盛られてしまいました。私は食べきれんのだろうか、憂鬱になりながら席に着きました。

すると、机の荷物がきれいに片づけられ、給食ナフキンがしかれているのに気づきました。私は首をかしげながら席に着き、給食を食べ始めました。そういえば、休校中に書いた自己紹介文の好きな食べ物欄に、「白ご飯」と書いたことを思い出しました。そして、どんなに食欲のない日も白ご飯だけは食べ続けていたので、この日も食べることができました。

掃除の時間の前に手洗いから帰ってくると、私の椅子と机は掃除しやすいように教室の後方へ移動されていました。クラスのみんなの様子を注意深く見ていると、目と目で合図を送り合いながら、私に負担をかけないよう、先回りして動いてくれていることに気づきました。

一人ひとりの小さな親切がスクラムを組んで、やせ細った私の体を支えてくれていると感じました。あのときは言えなかったけれど、この場を借りてクラスのみんなに「ありがとう」と伝えたいです。今では、枯れ枝のようだった手足が懐かしいと思うくらいにたくましくなりました。

今度は、私から小さな親切をみんなに届けたい、そう思いながら毎日を過ごしています。言葉はなくても、見えなくても支え合える大切さを学ぶことができました。